様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ１３１６３

研究課題名（和文）ベラルーシ共和国のロマ（ジプシー）の方言の記述言語学的研究

研究課題名（英文）A descriptive linguistic research on a Rromani dialect spoken in the Republic of Belarus

研究代表者
角　悠介（Sumi, Yusuke）

神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員

研究者番号：５０８３７３４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では政治的理由により情報の少ないベラルーシ共和国において、フィールドワークを通じ今現在話されているロマ民族（ジプシー）の方言の一つを記述し、そこにベラルーシ語の部分的影響を発見した。研究の成果の一部をルーマニアにおける国際学会で発表し、その内容をまとめ国際学会誌に掲載した。ベラルーシのロマニ語方言に関する言語資料は数が少なく、よって学会誌に掲載された「不思議の国のアリス」の一部のベラルーシ・ロマニ語方言訳とその分析は後世のロマニ語の比較研究において重要な比較研究資料となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ベラルーシ共和国は政治的理由により研究者が足を踏み入れるのが難しく、そこで生活する少数ロマ民族の言語についての資料は極端に少ない。その国に於いて、フィールドワークを通じてロマにインタビューを行い、実際に話されているロマニ語を部分的に記述し、それを国際学会誌に言語資料として掲載できたことの意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：We described by fieldwork a Rromani dialect (the language of Rroma - Gypsies) spoken at the present time in the Republic of Belarus where we have only few information about the Rromani language because of its political situation and found out a partial influence of the Belarusian language on it. We presented a paper about a part of our research at an international academic conference in Romania and published it in an academic journal. There are very few of corpora of Rromani dialects spoken in Belarus. Therefore our paper about the Rromani translation of a part of Alice in Wonderland and its analysis will be a valuable source for comparative studies of the Rromani language.

研究分野：言語学

キーワード：方言記述　言語接触

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）本研究における調査対象の言語「ロマニ語」は、主に「ジプシー」の呼称で知られる「ロマ民族」の言語である。日本でも一般的なこの「ジプシー」という名称は英語圏で長らく用いられてきたが、侮蔑的意味を持つため、現在は「ロマ」に置き換えられる。「ロマ」とは彼らの言語「ロマニ語」における彼ら自身の自称である。ロマは長い放浪の旅を経て現在ヨーロッパを中心とした国々に生活する民族であり、独自の国を持たない。

（２）「ジプシー」の語源は「エジプシャン」、つまり「エジプト人」である。これはロマが中世ヨーロッパにおいてエジプト（または「小エジプト」）から来たと考えられていたからである。長期に渡りエジプトに起源を持つと考えられていたロマであるが、1776 年にハンガリー人のヴァーリ・イシュトヴァーンによって「ロマのインド起源説」が唱えられ、後の比較言語学研究によって彼らの言語「ロマニ語」がインド語派に属することが明らかになった。ロマニ語にはインド語派の語彙に加え様々な言語からの借用語が含まれているが、これを分析すると彼らの先祖の旅のルートを大まかに把握することが出来る。特定の言語の影響はロマとその言語の話者との接触を証明するからである。

（３）上に述べたようにロマは欧州を中心に生活しているが、彼らの言語「ロマニ語」は話者の生活圏、国や地方によって独自の発達を遂げ、あるいは消滅している。これ故、数多くの方言が存在する。ロマニ語の方言分類に関しては過去に様々な試みがなされ、現在も研究者の間でも議論が分かれるところであるが、「地理的分類」と「歴史的分類」に二分することが出来る。前者を代表するのは、マンチェスター大学のヤロン・マトラスによる「北方言郡」「中央方言郡」「バルカン方言郡」「（ルーマニア語の影響の強い）ワラキア方言郡」の 4 大分類である。これに対して、フランス国立東洋言語文化研究所（INALCO）のマルセル・クルチアーデは、「放浪生活を送っていたロマの方言は各地で複雑に入り組んでいるため、地理的分類は大きな意味をなさない」として、主に音声変化を基に方言を分類する「歴史的分類」を提唱している。

（４）マトラスはベラルーシ近隣で話される方言として、北方言郡に分類される「北東方言派（別名 Polish-Baltic-Northern branch）をあげている。注目すべきは、この項目にロシア、リトアニア、ラトビア、ウクライナの方言への言及はあっても、この 4 か国が取り囲んでいるベラルーシ共和国に関する記述が一切ないことである。クルチアーデも同様で、自書のロマニ語方言分布図で世界の 67 の方言を音声変化に基づき 4 つに分類しているが、ベラルーシの方言への言及はなく、現在のロシアで話されているとされる二つの方言「北ロシア方言」「南ロシア方言」の話者が通った道筋を示す大まかなラインの上にベラルーシがあるだけである。

（５）つまり、ベラルーシ近隣諸国のロマニ語方言については研究が行われており、ベラルーシの方言についてもある程度の類推が可能であるが、実際にベラルーシ国内の方言をきちんと言語学的に記述した例が管見の限り存在しない。また、近隣諸国のいずれかの方言には共通性があることは予想できるが、そこには必ず「ベラルーシ語の影響」がうかがえるはずである。ベラルーシは複雑な言語状況を抱えており、近年ベラルーシ語復興運動が再び盛んになってきているが、人々が現在日常生活に用いているのはロシア語である。しかし、ロシア語の影響だけでなく、ベラルーシ語が第一言語であった時代の名残が、ロマニ語方言に確認できるはずである。ベラルーシで話されているロマニ語方言の実態はどのようなものなのか、そして、そこにはどのような特徴が見られるのか。これは現代のロマニ語学において明確な答えが出ていない部分である。

２．研究の目的

比較的資料の多い近隣諸国のロマニ語方言からの類推ではなく、実際に現場に赴きフィールドワークを通して今現在ベラルーシ共和国で話されているロマニ語方言を言語学的に記述し、さらにその方言におけるベラルーシ語の影響を明らかにする。ベラルーシのロマニ語方言に関する資料は少ないため、これを記述分析したものを国際学会誌等で発表し、後のロマニ語方言の比較研究の資料として活用してもらうことも本研究の大きな目的である。

３．研究の方法

ベラルーシ共和国の地理的中心かつ首都であるミンスクに複数回滞在し、ミンスク国立言語大学や地元のロマ支援団体などの協力を得て、現地に暮らすロマニ語のネイティブスピーカー（情報提供者）を捜し出し、本研究の趣旨を説明し調査協力を依頼した。ルーマニアとハンガリーのロマニ語方言を学んだ研究者は、情報提供者ともロマニ語による意思疎通が可能であることが判明したため、情報提供者と常にロマニ語でコミュニケーションを取るようにした。滞在期間中における会話や SNS 上のメッセージのやり取りの内容を本人の了承を得たうえで録音・記録し、あるいはロシア語のテキストをロマニ語方言に翻訳してもらうなどして言語資料を集め、それを後に比較・分析した。また、ミンスクの国立図書館においてロマ関係資料を収集した。ベラルーシの政情不安およびコロナ禍において渡航が制限された時期は情報提供者とオンラインでやりとりを続け言語資料を収集した。

４．研究成果

（１）幸いなことに情報提供者（以下Ａ氏とする）はミンスクにおける現在のロマ・コミュニティの形成の歴史に詳しい人物であった。現在のベラルーシ共和国領におけるロマに関する最も古い記録はリトアニア公国時代の 1501 年のポーランド王・リトアニア大公アレクサンデルによって書かれた、ヴァスィルと言う名のロマの頭領に対し特例処置を与えることを明記した公文書である。当然これ以前から同領内にロマが生活していたことが想像できるが、これと現在のベラルーシのロマを直接関連づけることはやや難しい。ロマの多くは放浪生活を送っていたために生活圏が流動的である。また、ミンスクは第二次大戦中ナチス・ドイツ軍によって壊滅的な被害を受けた。このため、今現在のミンスクにおけるロマ・コミュニティも第二次大戦以降に新しく形成されたことが現地の関係者からの証言や資料からも明らかになった。

（２）Ａ氏はミンスク生まれの音楽を生業とするロマ男性である。証言によると、彼の先祖は迫害を逃れて 1935 年（本人は「1935 年」と述べたが、第二次大戦後 1945 年の記憶違いの可能性もある）にポーランドからウクライナを経由してミンスクに移住した。ウクライナでの滞在期間は明らかでないが、彼の祖父はウクライナにおいて戦争の混乱に紛れて他人の身分証明書を取得し、ウクライナ人になりすますことで迫害を逃れたという。つまりＡ氏の現在の苗字は他人の物である。初めてのインタビューでは言及を避けたが、後に自身の本来の苗字を明かしてくれた。本来の苗字は「音、音符」の意味を含む。これに関連付けて彼は一家が昔から音楽に従事していたことを示した。祖父がウクライナで雷に打たれて死ぬと、祖母が一家の大黒柱となり（4―5 人の子供がいた）、後にミンスクに移住する。祖母がウクライナからミンスクに渡ってくる際には「沢山の馬と金を持っていた」という。ここで歴史的に重要な証言が「当時ミンスクにはロマは１－２家族しかいなかった」ということである。祖母はミンスクに大きな家を購入した。すると、その家の周りに後からミンスクに流れてきたロマたちがあばら家を建て初め、コミュニティが少しずつ形成されていった。大変聡明だった祖母はそのコミュニティの相談役として他のロマの生活のアドバイスなどをしていたという。ただし、Ａ氏自身はコミュニティで生まれ育ったわけではない。コミュニティは後に区画整備で解体され、Ａ氏は別の場所で両親に育てられた。

（３）第二次大戦後のミンスクにおける初期のロマ・コミュニティ形成に際し、Ａ氏の一族が中心的な役割を果たしたことが判明したが、コミュニティ形成とミンスクにおけるロマニ語方言の系譜は分けて考えるべきである。明らかなのはＡ氏の一族はポーランドのロマニ語方言を話していたということである。その後祖母を頼るように家の周りに集まったロマ達がどこから来て、どのようなロマニ語方言を話していたのかは推測できない。しかしながら彼らの話すポーランド系ロマニ語方言も現在のミンスクで話されるロマニ語方言の一つであることには変わりがない。政府研究機関によるプロジェクト *Social integration of the Roma population in Belarus: providing the right for equality* の調査によると、2014 年時点でミンスクには「1002 名のロマが生活し、うち 628 名がロマニ語を母語として認識している」とある。ミンスクのロマニ語話者人口が少なく、このことから、例えＡ氏の一族のみがポーランド系統のロマニ語方言を話すとしても割合としては決して少なくない。ベラルーシのロマ民族学者のオルガ・バルトシュはベラルーシ国内のロマのグループとして *berniaki, siniaki, haladore, udieiki, maniuki, ciabanciki, bakre, korsaki* を挙げている。Ａ氏に自身がこれらのどのグループに属するのかを尋ねると、一度 haladore の可能性を示唆したものの、コミュニティの外で生まれ育ったＡ氏は自身のグループ名を特に認識したことがなかったらしく、明確な答えはなかった（因みに haladore は「兵士」を意味するロマニ語で、第一次大戦中従軍したロシア系ロマのグループを指すので、Ａ氏の一族とは関係がないと思われる）。バルトシュによると berniaki, udieiki, korsaki のグループが自身らの出生を「ポーランド・ロマ」と関連付けていることからも、ベラルーシ共和国にポーランド系のロマが一定数存在することは疑いようがない。また、Ａ氏からロマニ語方言に関連し「berniki のやつらは～のように発音する」といった発言がたびたびあったことから、少なくとも彼自身は berniki ではないことが伺えた。

（４）研究対象のＡ氏の一族のロマニ語方言（正確には「ファミリオレクト（家族語）」）であるが、氏の証言からもそれがポーランド系統のロマ方言であり、三代にわたってベラルーシのミンスクで発達したことが判明した。収集した言語資料の分析により、この方言の基礎的な文法（動詞、名詞、形容詞変化等）は大まかに記述することができた。特に Anton Tenser (2005)に記されたリトアニアのロマニ語文法との共通点が多く、これらが同じ方言グループ（Matras の述べるところによる Polish-Baltic-Northern branch）に属している事が伺える。

（５）予想した通りスラブ語の影響が顕著であった。語彙を観察すると、ベラルーシで使用されている２言語からの借用語が顕著である。しかしながらロシア語とベラルーシ語は近隣言語であるために共通の語彙も多く、どちらの言語から借用されたのか判断がつかないものもある（例えばこのロマニ語方言の думинэла「考える」の語源はロシア語の думать ともベラルーシ語のｄｕｍａｃｬとも、どちらとも言える）。また、明確にロマニ語でもロシア語でもなく、ベラルーシ語からの借用語と思しき単語でも、中にはポーランド語と共通している語彙もあるために判断がつかないものもある（例えばこの方言の анёло「天使」はベラルーシ語の анёл かポーランド

語の anioł のどちらかが起源であると考えられる）。この内、間違いなくベラルーシ語からの借用語と断定できるロマニ語の単語は бульба「じゃがいも」である（発音はロマニ語でもベラルーシ語でも同様）。これはベラルーシ語においてジャガイモを指す語彙である。ウクライナ語にも同じ語彙があるが、一般的にジャガイモを指すには картопля が用いられる。ウクライナ語の бульба はジャガイモに限らず、主に「芋」、つまりジャガイモのみならず「肥大化した植物の根」を表す。A氏の祖父母はウクライナを経由してミンスクへ移住したが、ウクライナはあくまでも経由地に過ぎない。このため、この語彙がウクライナ語から借用されたとは考えにくい。この他、文法的（語形・統語論）にもスラブ語の影響が見られ、例えば「そこにロマがいない」といった否定の意味を表す文において、ロシア語やベラルーシ語と同じく「ロマ」が生格（ロマニ語では対格）の形を取る。

（５）本研究によって今現在ベラルーシ共和国の地理的中心に位置する首都ミンスクにおいて話されるロマニ語方言（下位方言）の一つの概要が明らかになった。また、ベラルーシ語の影響も部分的に受けている事が証明された。

（６）これらの研究結果の一部を２０２１年９月２４日にルーマニアで対面・オンラインのハイブリッド開催された国際学会にて発表した。ルーマニアは世界で最もロマニ語人口が多い国であり、ロマニ語研究への関心も高い。

（７）上記発表をまとめ、学会誌に掲載した。ベラルーシにおけるロマニ語の資料自体が極端に少ない中、本研究に於いて採取され発表されたロマニ語テキストの価値は極めて高く、今後のロマニ語方言比較研究に大きく貢献する。

（８）本研究終盤において、情報提供者のA氏および母君が COVID-19 と思われる感染症にて命を落とした。A氏の二人の娘はロマニ語を話さず、亡くなった親子が一族で唯一のロマニ語話者であった。したがって、本研究に於いて記述されたロマニ語方言は「つい最近までベラルーシのロマの一族によって話されていたロマニ語方言」となった。見方を変えれば、この方言（家族語）は本研究が行われなければ記録されることもなく消滅していたことになる。収集した音声資料は何十時間にも及び、さらに掘り下げて分析する価値がある。今後も引き続き本研究で得た言語資料を分析し、言語資料として出来るだけ多く後世に残していくことが研究者の責務である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 SUMI Yusuke	４．巻 8
２．論文標題 Observatii asupra fragmentului din Alice in tara minunilor in limba rromani din Belarus	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Cultura si comunicare (BARLEA, Roxana et alii, Bucuresti: Editura Universitara)	６．最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 SUMI Yusuke
２．発表標題 Comments on the fragment of the story "Alice" in the Rromani language of Belarus
３．学会等名 The 19th International Colloquium Latinitate - Romanitate - Romanitate, Targoviste, Romania（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関